

読者のページ

日本橋100周年

～官民連携で歴史・文化的価値を高める～

都市ジャーナリスト

森野 美德 MORINO Yoshinori

◆お江戸日本橋

「お江戸日本橋 七つ立ち～」と唄われた日本橋(東京都中央区)が2011年春、石橋になってから100周年を迎えた。徳川家康は江戸開府と相前後して、1603(慶長8)年、初代の日本橋を建造、東海道など五街道の起点と定めた。現在の石造2連アーチ橋は1911(明治44)年4月3日に完成し、関東大震災、東京大空襲など幾多の苦難に耐え、1999(平成11)年、国の重要文化財に指定された。

国土交通省東京国道事務所は100年間の経年劣化状況を調査・分析したうえで、大規模な補修工事を施した。そしてこの地域の老舗や町会の人たちは橋側壁面の洗浄プロジェクトを担った。地域のシンボルである日本橋をさらに100年長持ちさせるため、官民連携で取り組んでいる。

◆日本橋地域のシンボル

日本橋の車道の真ん中に、日本の道路の起点「日本国道路元標」が埋め込まれている。都電が走っていた頃には、架線を支えるポールに「東京市道路元標」と記されていたが、都電の廃止とともにそのポールは、橋詰め広場に移設された。現在の元標名称は1972(昭和47)年4月、当時の佐藤栄作首相が書いたもので、裏面に日付と署名が記されている。今回の補修工事でいったん道路元標を取り外した際にも確認された。



写真1 日本国道路元標の表・裏

現在の石橋が

出来た明治末期は、富国強兵政策が軌道に乗り、日清・日露戦争を経て、日本が近代国家としての骨格を整えた時期だった。設計と工事監督は東京市の橋梁課長・樺島正義や主任技師の米元晋一等、意匠は妻木頼黄、彫刻は渡辺長男である。いずれの分野でも欧米技術を体得した一流の専門家が手を携え、近代国家の中心にふさわしい風格のある石造2連アーチ橋を完成させた。

当時の日本橋地域には三越、白木屋、高島屋などの百貨店をはじめ、江戸期から連綿と続く老舗の商店、飲食店、和紙や刃物などそれぞれの技を売り物にした専門店が軒を連ねていた。魚河岸もあり、日本橋川は市場まで魚を運ぶ船の往来でにぎわっていた。関東大震災後、魚市場は築地に移転したものの、日本銀行本店を中心に金融・証券など関連企業が集積し、国際金融センターとして新たな市場機能で活況を呈した。

このような地域の中心に位置する日本橋は、近代土木遺産として国民共有の財産であると同時に、江戸・東京400年余の歴史・文化を色濃く残す日本橋地域のシンボルになっている。

◆大規模な補修工事

日本橋は関東大震災で火災に巻き込まれ、アーチ下面には焼け焦げて変色した痕跡が見られる。東京大空襲では焼夷弾が日本橋を直撃、歩道上の石材を一部破壊した欠落部分があるまま残っている。橋の裏面には経年劣化による亀裂や漏水も起きており、架橋100年を前に、抜本的な点検と補修が必要とされていた。

国土交通省は2005(平成17)年、「日本橋の保存と管理に関する検討委員会」を設け、約3年間、詳細な調査と分析を行った。その結果、道路面に多少の凹凸が見られるものの、構造物としての安定性、耐震性、耐荷性には問題がないとする一方で、雨水などの水の浸入に対して「路面の走行性維持の観点から防水対策を要する」との方向性を打ち出した。

東京国道事務所による補修工事は2010(平成22)年3月末から翌年の3月まで。路面の御影石を取り外して既存の基礎部分をすべて撤去、架橋当時の中詰め材を完全に露出させたうえで新たな床版を打設、防水層と保護層を設けて御影石を敷き直した。とりわけ歩道部では一つ一つの御影石に印を付けて元の場所に敷き詰めるなど、重要文化財としての価値を守るため、丁寧な作業を重ねた。橋の側面は経年劣化によって石材の表層が剥離していたが、地元関係者も参加して、本体から浮き上が

って剥落しかけているものをハンマーや素手で取り除いた。そのうえで、亀裂箇所に樹脂を充填し、基質強化剤を塗布して表面を保護した。

◆名橋「日本橋」保存会

日本橋地域では1968(昭和43)年、名橋「日本橋」保存会が設立された。老舗の百貨店、商店、飲食店、企業などの法人会員約100社、20の町会、約60人の個人会員で構成され、日本橋の保存と管理、PR、地域活性化と江戸文化の継承、川の浄化や水辺を生かしたまちづくりに向けて、多彩な活動を展開している。1983(昭和58)年には、日本橋上空に覆い被さる首都高速道路の高架橋を地下に移設するなどして、日本橋の雄姿をよみがえらせるために「よみがえれ日本橋宣言」を決議した。

国土交通省も「東京都心における首都高速道路のあり方委員会」「日本橋みちと景観を考える懇談会」を設置、様々な手法を検討してきた。有識者による「日本橋川に青空を取り戻す会」が当時の小泉純一郎首相に提言を行ったが、実現への具体的な道筋はまだ見えないままである。

このため保存会は当面、日本橋の清掃、美化、川の浄化など身近なところから機運を盛り上げようと、地道な活動を続けている。新年の箱根駅伝復路ルートに日本橋を組み込んだのははじめ、春と秋の「日本橋まつり」や7月第4日曜日の「橋洗い」も恒例のイベントとして定着してきた。橋洗いでは保存会会員、企業、消防団と地元の子供たちも参加し、デッキブラシやタワシで橋の隅々まで磨き上げている。今回の補修工事に連動して、保存会は日本橋クリーンプロジェクトを分担した。ドイツの洗浄機メーカーのケルヒージャパンの協力を得て、橋面の高圧洗浄を行い、石材にこびりついた汚れをきれいさっぱりと洗い落とした。

2011(平成23)年3月末、日本橋のたもとに中央区の防災船着き場が完成した。日本橋川を周遊する舟運ツアーやカヌー遊びなどで、川面から日本橋を眺める人が増えるものとみられる。

◆インフラ長寿化へ官民連携

「橋はできるだけ多くの歩行者が通り、船に乗って川面からも眺めるなど、多くの人間の視線にさらされることが大事。決定的な弱点があった場合、橋を見慣れた専門



写真2 1956(昭和31)年当時の日本橋(東京都中央区立京橋図書館所蔵)



写真3 現在の日本橋

家より、常日頃、利用している素人の素朴な疑問がきっかけとなって問題点が見つかることも少なくない」。国土交通省が設置した検討委員会の委員長を務めた依田照彦早稲田大学教授は長寿の秘訣をこう語る。

100歳を超えた日本橋が今後も末永く歴史と風格ある姿を保ち続けるためには、多くの人々から愛着を持たれ、国内外からの観光客やビジネス客の往来を増やす活動が欠かせない。日本橋地域がさらに魅力を高め、にぎわいを創出していくことが課題である。

日本の社会インフラを取り巻く状況は、建設一辺倒の時代から既存インフラの維持更新や長寿命化に重点を置く時代への転換期を迎えている。土木の世界でもアセット・マネジメントの重要性が認識されるようになった。道路、橋梁、鉄道、河川施設、上下水道などの社会インフラは国民共有の財産であり、それらのユーザーとして恩恵を受けるのもまた国民や地域住民である。アセット・マネジメントと言うからには、これらのインフラを社会全体の資産ととらえ、価値を高める努力が欠かせない。その担い手は国や地方自治体などの管理者だけでなく、地域住民や事業者などユーザーの役割でもある。

日本橋100周年をめぐる様々な事業やイベントに見られるように、優れたインフラの社会的な資産価値を高めるアセット・マネジメントは、官民連携がカギを握っていると言えるのではないだろうか。



写真4 夏の「橋洗い」会